

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0590500138		
法人名	株式会社 グレープ由利		
事業所名	グループホームいなほ 1号館		
所在地	秋田県由利本荘市大浦字八走123-7		
自己評価作成日	令和3年12月29日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 秋田県社会福祉事業団		
所在地	秋田市御所野下堤五丁目1番地の1		
訪問調査日	令和4年2月10日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

一人一人の現在までの生活を大事にしながら、施設でも安心して安全に、楽しみを持ちながら笑顔で生活できるように、日々業務にあたっている。職員は、日頃より利用者を人生の先輩として敬い、尊敬と感謝の気持ちを持って接するようにしている。地域の方が気軽に立ち寄ってもらえるように、町内会行事への参加、日常の挨拶や言葉掛けを心掛けている。事業所としては、積極的に意見を取り入れ、改善に向けた取り組みを日々続けていくことで、利用者様と職員がゆとりを持って笑顔で過ごせるような環境作りを大切にしている。

今年度新たな代表、管理者が就任、“利用者のこれまで生きてきた背景を含め、本人を深く理解することで利用者の望む心地よい介護や暮らしが提供できる”との考え方が職員に共有されている。職員はケアへの意見や提案を出し合い、協力しながら支援を行っている。代表、管理者は看護師資格を有し、医療と円滑な連携が図られている。食事制限の必要な方でも、制限の範囲内で補食やおやつを選択肢を増やし、食を楽しむことを大切に食事提供を行っている。開設当初から町内会に加入することで、近隣住民の理解協力が得られ、町内行事への参加や地域と連携した避難訓練などが実施できている。コロナ禍により地域との交流も難しい状況だが良好な関係継続に努めている。昨秋からラインアプリの活用により、家族への連絡や利用者の近況報告などを動画や写真で好評である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～53で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
54	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	61	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
55	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	62	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
56	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	63	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
57	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	64	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
58	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
60	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者と管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を基に、職員一人一人がその理念を発展させ、日々の介護や時代ごとの考えに対応しながら更新しつつ、多様なサービスを提供できるように努力している。	事業所理念「いつも笑顔で・なかよく・ほのぼの」とは事務室やホールに掲示し、職員間で周知され、利用者が安心して生活できるよう心温かな支援の実践を行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入し、日頃よりお世話になっている。今年度はコロナウィルスの影響で町内会との積極的な交流は行っていないが、お花や写真を頂いたりなど良好な関係が続いている。	コロナ禍以前は夏祭りや子供会等町内行事にも参加、近隣の住民とも散歩時等日常的に挨拶や声を掛け合う良好な関係を保っている。ホーム内壁面に飾られた花や風景の写真は近所の方からの寄贈。季節の草花や野菜、山菜などもご近所からいただく等親しい付き合いがされている。	
3		○事業所の力を活かした地域とのつながり 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に伝え、地域貢献している	運営会議で施設方針や出来事などを町内会長や老人クラブ会長へ報告し、町内へ伝えて頂けるようお願いをしている。また認知症の相談にも対応できる体制を整えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。今年度はコロナウィルスの影響で実際の会合は開けていないが、各委員へ定期的に資料を作成して送り、現状がわかるよう伝え続けている。	今年度はコロナウィルス感染症流行の関係で集合による運営推進会議の開催は出来ていないが、ホームの状況や活動の様子などを各委員に書面にて送付・報告している。また意見や助言等あればサービスの向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議を行った際は、毎回地域包括支援センターの職員に参加して頂き、市内の情勢や行事について情報を提供してもらっている。分からないことや困ったことがある時は、相談しアドバイスをもらっている。	市の保健センターとはコロナワクチン接種や感染防止に関し連絡を取り合っている。地域包括支援センターの担当職員、生活保護担当職員とは定期的に連絡を取り、必要に応じ相談をしている。地域ケア会議から地域の入所施設の空き状況等情報を得ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の施錠はせずセンサーの活用や職員同士の連携により見守りを強化することで、離設を防止している。離設があった際には職員とそのまま散歩を行い気分転換している。また職員研修で禁止行為を共有している。	身体拘束をしないケアに関する施設内研修を実施している。また身体拘束廃止委員会の議事録からも、どういったことが身体拘束にあたるかなど具体的な事例をあげて学んでいるホームの取り組みが確認できた。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修への参加や、施設では入浴やトイレ時に身体状況の確認・精神面では職員の話し方や対応の仕方を入所者様の表情や言動、カルテの内容から変化があればミーティングやその都度話し合い、原因や結果を毎月の報告書で家族へ報告をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修へ参加し学んだことを職員間で共有したり、入所者様の後見人と話しその方がストレスなく生活できるよう計画し援助している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所前には事前訪問をお願いし、契約の締結や重要説明事項の説明・疑問点がないか確認し、納得いただけるようにしている。変更等があれば、手紙や電話で連絡し訪問していただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常生活のコミュニケーションや表情・言動から思いを引き出したり推測し、コロナ前はご家族から運営会議の参加で意見等を頂いていた。また、運営会議の中で自治会長や民生委員等に意見を聞いてもらう事で地域に反映できる機会を設けている。	昨年秋から利用者家族と通信アプリであるLINEを繋げ(入居18人中14名)諸連絡や利用者の近況を写真や動画で伝え、家族からも好評である。ライン上では家族も気軽に意見や要望を言いやすく、またホームの対応もすぐに伝えられることで、家族等の意見がより運営に反映されるようになった。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員は、日常的に意見や思ったことを管理者に伝えている。毎月の各種委員会・定例会などで、話し合う機会を設け業務等に反映させている。	職員が代表、管理者、先輩に何でも相談しやすく、介護の提案もフリーに話すことができ、風通しのよい関係が築かれている。勤務の希望も対応してもらい、職員が働きやすい環境で前向きに仕事に取り組めると職員聴き取りからも確認できた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格取得や研修等についての情報を提供し、資格取得のために勤務調整など配慮している。就業規則において人事評価の基準を公表し、キャリアパスの内容に応じて給与を定め、職員の意欲や処遇の改善に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、代表者自身や管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎年の研修計画を策定し、職員へ内部研修を実施して資質の向上に力を入れている。今年はコロナウィルスの影響により外部研修にはあまり参加できていない。また、それぞれの研修内容は、復命書や議事録にて回覧し、全職員が確認できるような体制である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、代表者自身や管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に参加し、コロナ前は他施設職員との交流や研修に参加していた。見学対応など、自施設の情報は積極的に提供するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前のアセスメントで、本人や家族と面談し不安な要因の対策を考える事で安心して入所して頂けるように努めている。入所後に、声掛けや傾聴を多くし、ご本人の要望や訴えがある時には、できるだけ意思に添える様に職員間で話し合い、意見交換を経て不安の解消に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期相談の段階、または入所後の面会時等にも、家族が困っていることや要望を伺い、サービス内容について説明している。入所させることに家族が後ろめたさを持たせないよう、充分家族の思いを受け止めるように努力している。		
17		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	カルテの情報や日々のコミュニケーションから何をどの程度出来るか把握し、生活背景も考慮し、出来る事や興味ある事を職員と一緒に行う事で関係構築に努めている。		
18		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月、ご家族様には日々の暮らしや健康状態が分かるように写真や生活状況をLINEで連絡している。コロナ前は希望に沿ってご家族様と一緒に過ごし、自由に外出して頂けるように支援している。		
19	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コミュニケーションを通し、思い出について話し合う事で記憶にとどめている。また、コロナ前は外出レクリエーションや家族との外出、そして地域の人との新しい馴染みの関係の構築も含め支援している。	コロナ禍により家族や友人の面会が制限される中、電話や手紙などで関係継続の支援を行っている。家族とはLINEのビデオ通話も活用し喜ばれている。	
20		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入所者様の出来る能力を理解し、季節に合わせた作業(山菜の下処理や柿の皮むき)や職員が提案した余暇活動を行うことで、入所者同士が協力し、よりよい関係を築けるよう努めている。		
21		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了にあたり、ご家族様や担当ケアマネジャーとの話し合いを持ち、退所後もLINE等で支援相談できるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
22	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	情報提供書や日々のコミュニケーション、家族から聞いた内容から、本人の思いに添ったケアを心掛けています。意志表示が難しい場合には、上記から背景等を考慮して代弁し、本人の表情や言動を観察し家族に伝えている。	本人を理解するためには、その人が生きてきた背景を知り、今表出される言動は「何故そうなのか」と職員間で考え、話し合う事を大切に、利用者一人ひとりの思いに添ったケアを心がけている。	
23		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、生きがい、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者の情報を把握することを大切にしており、本人や家族との会話から知ることが多くあるので、会話する機会を出来るだけ多く作っている。		
24		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	担当職員がアセスメントシートに記入し、心身状態や出来ることを把握している。また、コミュニケーションから背景等を理解し、アセスメントシートと照らし合わせ、どのように1日を過ごすのか話し合いながら決め、職員間で共有している。		
25	(10)	○チームでつくる介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人にも意見を伺い、家族には来訪時や電話にて意見を伺っている。3ヶ月に1回カンファレンスを行い、介護計画に反映させている。	担当職員が日常の支援経過や医療専門職の意見などをまとめ報告し、毎月職員間で話し合っている。計画作成責任者が3ヶ月毎に見直しを行い、ケアカンファレンスを実施し、家族の要望など確認しながら介護支援計画を作成している。	
26		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録やチェック表を基に、申し送り等で情報を共有している。日々変化のあった時は、その都度話し合いを持ち、それを介護計画に反映させている。		
27		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナウィルスの影響で、外出全般を控えているため、地域の行事には参加できていない。訪問美容は継続している。		
28	(11)	○かかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等の利用支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、家族の希望で協力医療機関に変更した方がいるが、入居前からのかかりつけ医を継続している方もいる。いずれも家族や本人の意向を確認している。	本人・家族の希望に添い、かかりつけ医は入居前の医療機関を継続したり、ホーム協力医療機関に変更したり様々である。代表、管理者が共に看護師資格を有し、必要に応じ通院の付き添いを行うこともあり、医療機関とは良好な協力関係にある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員は利用者の状況悪化時には、昼夜を問わずに対応・受診し、医師や病院看護師との連絡、家族への状態説明、職員への指導等をしている。		
30		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、病院への情報提供を行い、入院中は家族との情報交換やコロナ前は病棟を訪問して、状態を確認している。退院前には、病院で家族も一緒に担当者会議を行い退院後の支援が適切に行えるようにしている。		
31	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化、末期に対しての指針を説明し同意を得ている。その時々に合わせてケアの方法を家族とも話し合い、実践している。本人や家族の思いや考えは変化していく事もあるため、その都度、確認し方向性を決めている。	入居時にホーム指針を説明している。利用者の状況に合わせ、早い段階から今後の支援の方針や施設移行を含め家族と話し合いをしている。ホームの方針として看取りは行っていない。看取り支援については看護師で前任グループホームでの看取り支援経験のある管理者が慎重に準備を整えてから検討することのこと。	
32		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の実践訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ほぼ全ての職員は、救命講習を受講している。施設内にAEDも設置し、使用方法の研修も年1回行っている。		
33	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域住民の協力のもと、火災等を想定した避難訓練を年2回以上は実施している。運営推進会議等で、災害時の対応や避難場所の確認など地域の方と話し合い、改善につなげている。	火災想定避難訓練を年2回以上実施。開設当初から避難訓練には地域の方も参加し、近隣との災害時の協力体制を築いて来た。マニュアルの確認や非常用階段避難車の操作訓練の実施状況なども報告書から確認できた。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
34	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	認知症の程度や身体的機能を理解し、どのようなアプローチが有効かを考え対応している。また、介護者自身も環境の一部であることを理解し、対応する際の声量・内容・場所等の環境整備も行っている。	利用者一人ひとりのこれまでの生活や人となりをよく理解し、常に敬意を持って接することを心がけている。声かけや言葉遣い、プライバシーへの配慮など職員間でもお互いに確認し合っている。	
35		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	些細な事でも選択肢を提案し、目で見て選んで頂くなど自己決定ができるように努めている。うまく表現できない方に対しては、表情やしぐさ等で思いを汲み取ったり、言葉が出るまで待つなどの対応をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	今までの生活背景や施設での生活リズムを理解したうえで過ごして頂いている。しかし、認知症の程度により、何をしたいか決められなかったり、昼夜逆転が起こる可能性があるため、一人一人に合った選び方を提供したり、食事や就寝時間など大まかな生活リズムは決め援助している。		
37		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その日に着たい服を選んで頂き、鏡の前で身だしなみを整えている。外出やお祭りなどの行事に合わせて、着替えたりおしゃれを楽しんで頂いている。		
38	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人一人が食べやすいように一口サイズにしたり、柔らかくして提供している。「お楽しみメニュー」の時は、旬の食材を使って職員が献立を作っている。利用者様に盛り付けしてもらい一緒に楽しみながら食事を作り、片づけや食器拭き等も協力して頂いている。	食事は一人ひとりの健康状態に合わせ、ペースト状ではなく、食材の形状や風味をなくさないよう配慮し、楽しめる食事の提供を心掛けている。業者からの食材納入は変わらないが、食事準備を担当する職員を新たに雇用し、看護師の指導の下、食事制限の範囲内で好きな補食や「お楽しみメニュー」、おやつ作りなど季節を感じながら食事を楽しんでもらえるよう工夫している。食事準備や片付けを手伝っている利用者もいる。	
39		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう状況を把握し、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の状態を把握し、その方に合った摂取量となるように調整している。食事量や水分量の低下が見られた場合には職員間で相談し、その方が食べやすいように工夫している。きちんと栄養を摂って頂くために、その方が好む補食品を購入し、提供することがある。		
40		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は口腔内の清潔を維持して頂く為、口腔ケアを行っている。義歯を使っている方には夕食後、洗浄剤を利用して頂いている。歯磨きコップや歯ブラシの消毒も定期的に行っている。		
41	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の認知症状をアセスメントし、自立している機能を理解する。失禁によって、自尊心や自立の低下が考えられるため、飲水量を確認したり、身体機能の考慮、排泄の時間やパターンを理解し誘導する事で失禁やパット使用を減らしている。	一人ひとりの排泄傾向を把握し、その人に合わせた排泄支援を行っている。職員間で常にケアの検討をし、排泄の自立に向けて取り組んでいる。紙パンツ使用から布パンツに変更した方もおり、支援の効果が表れているとのこと。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	身体機能や習慣を理解し、便秘なのかを判断する。そのうえで医師に報告し、処方や水分摂取、適度な運動、バランスの良い食事、規則正しい生活等を促している。		
43	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングや健康状態に合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回の入浴であるが、入浴の時間帯(午前・午後)や入る順番は、本人の意向や身体状況、処置の必要性等により調整している。その方に合わせた介助を統一することで、気持ち良く入浴して頂けるように支援している。	入浴時間はなるべく本人の希望に添い調整している。一人ひとりが満足できるよう時間をかけ入浴を楽しんでもらえるよう心がけている。入浴しながらの方への声かけは職員間で相談しながら工夫している。	
44		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	寝具は、自宅から持ち込む方と、リースを利用されている方がいる。安眠して頂けるように、室温を調整し、寝具は定期的に交換して清潔を保つようにしている。日中の活動量を多くし、夜間ゆっくりと眠れるよう配慮している。休息は、ご本人のペースでゆっくりと居室でとっている。		
45		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解に努めており、医療関係者の活用や服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護師が個人用の薬ケースに仕分けし、毎回配薬の際に確認しながら対応している。服薬ファイルを作成し、薬が変更になった時は、各連絡用紙に記載するとともに、服薬後の様子も観察し記録している。		
46		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人の得意な事や、自分の持っている能力を生かせるように、その方々のリズムを大切に、食事の手伝い、ドライブ、お菓子作りなどの行事に参加して頂き、個々に合わせた支援を提供している。		
47	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に合わせて散歩、ドライブ、外での食事等の機会を設けている。コロナウィルスの影響であまり外出できていないが、気分転換と利用者同士の交流を深めるため、施設内行事の充実に取り組んでいる。	コロナ禍により人混みを避けるため買物外出等は難しかったが、ドライブに出かけ気分転換を図っている。ホームの周辺の散歩なども入居者の希望に沿って行っている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭に関しては、トラブル防止のため小遣いを施設で管理している。お金を持っていないと不安な方は、少額のお金を自己管理している方もいる。毎月家族に小遣い帳のコピーを送付している。		
49		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの希望があれば対応している。本人が電話したい時や家族から電話があった時は、電話をとりつぎ話をしてもらっている。手紙を出したい方には、切手の購入や差出の支援をする。		
50	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、臭い、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合った植物を一緒に育てたり、リビングには季節感のある装飾も行っている。また、湿度・温度計を設置して利用者が過ごしやすい空間づくりに努めている。	壁面に毎月の行事、レクリエーション場面の写真が飾られ、リビングには趣味・余暇活動の道具が手に取りやすい状態で揃えてある。室温、湿度を快適に保ち、高い天井からの採光も良い。訪問時利用者は大画面のテレビで冬季オリンピックの競技観戦を楽しんでいた。	
51		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングとは別の場所にイスを置き、休憩できるよう配慮している。行事等を行う場合でも、出席を強制したり席を固定したりせず、利用者の希望を尊重するように対応している。		
52	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の使い慣れた物を持ち込み、本人が使いやすいように整理整頓している。居室内は、本人の意向に合わせ、塗り絵や装飾品などを飾っている。利用者にとって自宅に近い環境・居室づくりを日頃から意識している。	居室には本人が入居前に暮らした家から馴染みのものを持ち込んだり、利用者によく会話しながら本人の意向に沿って職員が装飾や整頓を支援している。物の配置など安全への配慮も心がけられている。	
53		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人一人に合わせ、安全に活動できるように支援している。手すりを取り付けたたり、必要に応じて杖やシルバーカー、歩行器を利用して移動してもらっている。掲示物や時計等は、目の高さに合わせ分かりやすいように設置している。		